

2020 年度懸賞論文

広がる地方の国際交流

——鹿児島県で続く「からいも交流」の歴史——

法政大学国際文化学部

松本悟ゼミ 4年

17G1113 春口龍一

広がる地方の国際交流
——鹿児島県で続く「からいも交流」の歴史——

目次

1.	なぜからいも交流は、約40年活動を続けることができているのか	2
2.	先行研究レビュー：「地方の国際化」と国際交流・国際協力活動	4
2.1	本研究における国際交流と国際協力の定義	4
2.2	地方の国際交流・国際協力活動が停滞していった理由	4
2.3	村おこしや過疎社会の活性化の手段としての、地方の国際交流・国際協力活動	5
2.4	鹿児島県内で約40年間続くからいも交流	6
2.5	本研究の構成	7
2.6	調査の手順	8
3.	調査結果：からいも交流の活動の歴史	11
3.1	大隅半島から始まった国際交流	11
3.2	活動の広がり	11
3.3	生き抜いてきたからいも交流	13
3.3.1	地に足のついた国際交流	14
3.3.2	交流存続を望む声	15
3.3.3	過去の参加者とのつながりと新たな活動	16
3.4	人々を巻き込む、「原点」	16
4.	結論と考察：国際交流が長年続く理由	18
4.1	結論	18
4.2	考察	19
4.3	本研究の限界と意義	19
	参考文献	20
	巻末資料	22

1. なぜからいも交流は、約 40 年活動を続けることができているのか

地方¹の国際化が叫ばれて約 40 年が経つが²、地方にとっての国際化にはどのような意義があるのだろうか。本研究は、鹿児島県で約 40 年間続いている小さな国際交流を通じて、このことについて考えていく。

「地方の国際化」という言葉の広がり背景には、プラザ合意に伴うバブル景気や旧自治省による様々な構想がある。1985 年のプラザ合意以降の円高によってバブル景気が始まり、ヒト、モノ、カネなどの移動が加速し、日本人の海外渡航者数は 1990 年には 1000 万人を超えた（佐藤 2011）。急激な円高や貿易摩擦が金融だけでなく、一次産業にも大きな影響を与えるようになった。例えば、日本はアメリカとの貿易摩擦により国内市場の開放が求められ、オレンジや牛肉などの農産物の輸入が解禁される中、国際化が農業や畜産を営む地域にとって大きな課題となった（ibid.）。

このような時代背景に伴い、旧自治省は様々な構想を打ち出した。1987 年の「地方公共団体における国際交流の在り方に関する指針」では、旧自治省が予算措置を講じ、各地方自治体³は国際化の推進政策や事業計画を策定して実施することとなった（榎田ら 2004）。1989 年の「地域国際交流推進大綱の策定に関する指針」では、地域国際化協会の設立が各地方自治体に要望され、全国で国際交流協会が設立された（毛受ら 2003）。

1980 年代は国際交流がある種のブームとなり、「地域⁴の国際化」や「地方の国際化」のキャッチフレーズのもとで、国際交流に取り組む地方自治体が急増した（ibid.）。90 年代は、地方自治体の国際協力に対する認知が進んでおり、地方自治体の間で国際協力が、「交流から協力へ」をスローガンに全国的に広がった（ibid.）。しかし、地方自治体には国際化に係る事業は国の政策を補完しているに過ぎないとの意識があったため、1990 年代

¹ 旧自治省による「地方の国際化」に関する構想は主に「地方公共団体」を対象としていた。総務省統計局は、「大都市」を「東京都特別区部及び札幌、仙台、さいたま、千葉、横浜、川崎、相模原、新潟、静岡、浜松、名古屋、京都、大阪、堺、神戸、岡山、広島、北九州、福岡」としている。従って「地方の国際化」を「大都市より小さい規模の地方自治体内、もしくは複数の地方自治体の行政機関や民間団体によって進められる国際化」と定義する。

（総務省．“地方公共団体の国際化情報、参考資料集、日本の地方制度の紹介（外国語資料）、関係団体リンク”．総務省．

<https://www.soumu.go.jp/kokusai/sonota.html#a>

最終閲覧日：2020 年 10 月 1 日：

総務省統計局．“地域区分に関する用語”．総務省統計局．

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/users-g/word7.html>

最終閲覧日：2020 年 10 月 1 日）。

² 1980 年代から 1990 年代にかけて、「国際化」が時代のキーワードとなり、「地方の国際化」という言葉が広く使われるようになった（片野田 2015）。

³ 政策文書上、地方公共団体になっている場合を除き、地方自治体と表記する。

⁴ 本研究では、市民が居住する、生活圏のことを指す（山下 2008：恩田 2010）。

になると、国際交流の推進事業は停滞⁵していった（山下 2008）。国際協力も全国各地の国際化の状況には差があったため、実質的な活動展開までに至っていない（毛受ら 2003）。

地方における国際交流・国際協力活動は徐々に勢いを失っていく傾向にある。そのような中、今後も人口減少や少子高齢化の著しい進行が予想される鹿児島県の大隅地方⁶を中心に、1980年代から約40年続いてきた民間の国際交流がある。それは「からいも交流」と呼ばれる。本研究ではこの「からいも交流」を取り上げる。詳細は第2章第4節で述べる。中央主導で進められた地方の国際化が停滞していく中、小さな規模の地方の団体を中心にした鹿児島のからいも交流が、なぜ約40年間も活動を続けることができているのか。これが、本研究の問いである。約40年続いてきたからいも交流を研究することによって、中央政府の政策的な意図に左右されない地方の国際化はどのようなもので、それにはどのような可能性が秘められているのかについて考察する。

⁵ 5年間ごとの国際交流団体の新規設立数は、1981年から1985年の間では156、1986年から1990年の間では301、1991年から1995年の間では314と増加していた（国際交流基金2006）。しかし、1996年から2000年間の設立数は205、2001年から2005年の間では126となっており、1996年以降、5年間の設立数が大幅に減少している（ibid.）。国際交流団体の事業費平均は、1981年から1985年の間では、2042.5万円、1986年から1990年の間では2102.2万円となっていた（国際交流基金2001）。しかし、1991年から1995年の間では1069.5万円、1996年から2000年の間では、882.5万円と減少している（ibid.）。

⁶ 鹿児島県．“大隅地域の現状と課題”．鹿児島県．

https://www.pref.kagoshima.jp/ao01/2019/documents/71098_20190313143021-1.pdf

閲覧日：2020年7月24日。

2. 先行研究レビュー：「地方の国際化」と国際交流・国際協力活動

本章では、「地方の国際化」のもとで行われてきた国際交流・国際協力活動が、先行研究でどのように論じられてきたのかを整理する。それを踏まえ、からいも交流を研究対象とした理由を述べる。最後に本研究の構成と調査方法を述べる。

2.1 本研究における国際交流と国際協力の定義

地域で行われている国際協力活動の多くは、相互の交流と支援・協力事業が並行して行われていることが多い（毛受ら 2003）。「地方の国際化」のもと、地域で行われる活動においては、国際協力という言葉の意味合いに国際交流も含まれており、それらの活動が混在していることが多いと考えられる。

従って、本研究における「国際交流」の定義を、「異なる文化を持つ人びと同士の間で互いに接し合う、地方自治体や民間レベルで行われる非営利活動」⁷とする。「国際協力」の定義は、「複数の異なるアクターが何らかの共通の目的のために、地球規模の課題に取り組むこと」⁸とする。地方の団体が国際交流と国際協力を並行して行っている場合、「国際交流・国際協力活動」と表記する。

2.2 地方の国際交流・国際協力活動が停滞していった理由

地方自治体による国際交流・国際協力活動は、財政不足によって事業予算の削減が行われている（毛受ら 2003）。地方自治体の財政難によって国際活動が縮小されたり、旧自治省の要請によって地方自治体の外郭団体として作られた、国際交流協会の縮小化や廃止の動きが見られたりしている（有田ら 2006）。地方自治体による国際交流・国際協力活動では、海外との交流事業が縮小するだけでなく、それを担当する団体自体が無くなってきている状況にあることがわかる。民間による国際交流・国際協力活動を取り巻く環境も厳しい。民間の国際交流団体は、地方自治体の国際交流団体に比べ、ヒト・モノ・資金・情報など、十分でないと指摘されている（榎田ら 2004）。

これらのことから、主に財政的な制約によって地方の国際交流・国際協力活動が停滞していったことがわかる。それに加え、国際交流・国際協力事業の運営者や参加者についても課題がある。例えば、活動に携わっているスタッフの能力不足や専門性の欠如（有田ら

⁷ 「日本の国際交流活動団体の現状」では、国際交流を「異なる文化を持つ人びと同士の間でおこなわれる様々な活動のうち、団体・機関によって意識的・意図的に行われている非営利活動」と定義している（国際交流基金 2001）。毛受ら（2003）は、民間や地方自治体レベルで、国を超え、海外の人々と接する機会を持つ活動が徐々に行われ、そのことに対して「国際交流」という言葉が使われ始めたと述べている。

⁸ 国際協力 NGO センター（JANIC）による、「国際協力 NGO ダイレクトリー」では国際協力を、「海外・国内をとわず、地球規模の課題（開発・人権・平和・環境・緊急救援など）にとりくむこと」と定義している。「国際協力用語集」では、「国際協力」の定義を、「何らかの共通の目的のために、複数の異なるアクターが、国境を越えて、資源を提供し合うこと」としている（佐藤 2017）。

（JANIC. “NGO ダイレクトリー情報公開・掲載基準” JANIC.

https://www.janic.org/for_ngo/ngo_guideline/

最終閲覧日：2020年9月27日）。

2006)や、事業に参加する住民の固定化・高齢化による組織の弱体化（毛受ら 2003）が指摘されている。こうした活動者の抱える課題も、地方の国際交流・国際協力活動が時代を経るとともに勢いを失った一因と考えられる。

地方の国際化に係る事業は国の政策の補完に過ぎないという見方が強く、地方の国際化政策は地方自らの発意や必要性によって始まったものではないと指摘されている（山下 2008）。第1章では、旧自治省主導で「地方の国際化」が広がり、国際交流・国際協力活動が始まっていったと述べた。つまり、先行研究からは、地方の国際交流・国際協力活動は、政府の指針にもとづく「受け身」の活動として始まり、予算の削減や人材の不足といった課題を抱え、時代の変化に対応できず停滞してしまったことが考えられる。

2.3 村おこしや過疎社会の活性化の手段としての、地方の国際交流・国際協力活動

旧自治省の呼びかけで始まった地方の国際化が徐々にその勢いを失う中で、先に挙げたからいも交流のように、旧自治省が牽引した形ではない、小さな規模の地方の団体を中心とした活動が、現在まで続いている事例もある。そもそも、先行研究では国際交流・国際協力活動に次のような意義があるとしている。毛受ら（2003）は、国際交流・国際協力活動の意義として、「地域社会発展への貢献」と、「国際社会の平和、発展の基盤づくりに寄与すること」を挙げている。そこに含まれる要素を図1に示した。

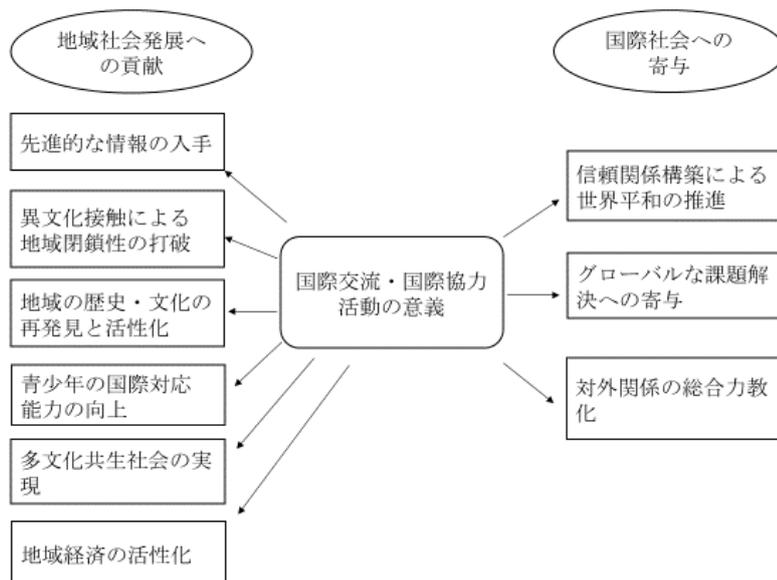


図1 国際交流・国際協力活動の意義
出典) 毛受・榎田・有田 (2003)

「地域社会の発展への貢献」という点では具体的な例として、1980年代に農村部で始まった国際交流・協力活動を地元の青年が担い、地域活性化のきっかけとなったことが挙げられている（毛受ら 2003）。この地方の農村型の国際交流においては、村おこしや過疎社会の活性化の手段として取り組まれている（榎田ら 2004）。ここで紹介されている国際交

流は、旧自治省の主導による「地方の国際化」の動きとは異なり、地元住民や地方の民間団体による「地方の国際化」の動きである。榎田ら（2004）は地方の農村型の国際交流の動きが80年代に始まったものであることは言及しているが、それが約40年後の現在まで継続しているかどうかについては触れていない。またそういった、村おこしや過疎社会の活性化の手段としての、地方の農村型の交流が続く理由も、明らかにされていない。

ここまで、「地方の国際化」のテーマのもとで行われてきた国際交流・国際協力活動が、先行研究でどのように論じられてきたのかを整理してきた。先行研究では、地方の国際交流・国際協力活動が停滞していった理由が指摘されていた。さらに中央主導だけではない「地方の国際化」の営みについて、その意義とともにある程度把握され、一定の評価を得ていたと考えられる。しかし、先行研究では村おこしや過疎社会の活性化の手段としての、地方の農村型の交流が続く理由は、筆者が調べた限り触れられていなかった。

地方の国際化が叫ばれた1980年代から、国際交流・国際協力活動を約40年間続けることができている理由を分析するためには、一時的な地方の国際交流・国際協力活動に目を向けるのではなく、一つの地方の国際交流・国際協力団体の活動を一定期間追う必要がある。そこで、80年代初めから活動を始め現在まで続けている、鹿児島県の「からいも交流」を研究対象とした。次節ではからいも交流の設立の経緯や主な活動を簡単に述べ、からいも交流を研究対象とした理由について述べる。

2.4 鹿児島県内で約40年間続くからいも交流

からいも交流は、東京や大阪などの都会で学ぶ外国人留学生を主に鹿児島県の農家⁹に招いてホームステイを行う事業である（毛受ら2003）。鹿児島のシンボルの一つである、「からいも」¹⁰にちなんで名付けられた村おこしである（永井1989）。受け入れ側がお金を参加学生に支払い招待するのではなく、学生側が参加費を払い、鹿児島県の農家に滞在する¹¹。拠点は、鹿屋市のボランティア団体「南方圏交流センター」であった¹²。発案者はその団体の代表でもあった、鹿児島県肝属郡内之浦町の出身者、加藤憲一氏である。加藤氏は1970年代に米国に留学し、帰国後東京の国際交流団体などで日米貿易摩擦問題などに取り組んでいた（原2010）。

加藤氏がからいも交流を始めたきっかけは、村に若い人の少ない、故郷の変わり果てた姿を目にしたことだった（村瀬1984）。そして第1回からいも交流は1982年に鹿児島県の大隅半島の、鹿屋市、串良町、内之浦町の3地区から始まった（ibid.）からいも交流の参加学生の7割は、アジアからの留学生である（加藤2001a）。

⁹ 宮崎県の一部の市町村でも、かつて交流が行われた。具体的には西都市、都城市、高鍋町、高岡町、佐土原町、山田町である。筆者が調べた限りでは、1988年に、山田町から初めて参加者が出ている。毎年宮崎県で交流が行われているわけではなく、2015年以降宮崎県で交流が行われていたことを示す記録は、筆者が調べた限り、見つからなかった。

¹⁰ 鹿児島県の方言で、「さつまいも」を指す（永井1989）。

¹¹ 2週間プランでは45000円、1週間プランでは35000円。（NPO法人からいも交流2020）。

¹² 2006年にNPO法人「からいも交流」となった際、鹿児島県霧島市福山町に事務局を移転。

活動は国際交流にとどまらず、国際協力にまで発展した。その国際協力活動は「カラモジア交流」と呼ばれる。これは、鹿児島県の農民や農業青年とアジアの農民の間で行われた。カラモジア交流は、「財団法人カラモジア」によって行われた。その活動の協力者や支援者は市、県、国際協力事業団（現在の国際協力機構。以下、JICA）、国連開発計画（UNDP）など徐々に大きくなった。それに伴い、活動のフィールドや規模も拡大した。からいも交流とカラモジア交流の活動を含めて、「カラモジア運動」と呼ばれている。しかし、「財団法人カラモジア」は2002年に基本財産取り崩しを発表し、カラモジア交流は頓挫した¹³。すると加藤氏は現場から離れ、財団は2006年に解散を発表した。加藤氏は、カラモジア交流と並行して続いていたからいも交流にも携わらなかった。からいも交流は現在も、1年に「からいも交流・春」と「からいも交流・夏」という形で2回行われている。

上述したように、カラモジア運動の過程で、基本財産取り崩しという不祥事があった。先行研究で指摘されていた、地方の国際化の課題や現状、停滞しつつある傾向を考えると、組織は簡単に廃止されたり、活動も中止されたりしやすいことが考えられる。しかし、からいも交流はそうした逆境を経験しながらも、約40年間活動を続けてきた。そこに、中央政府の政策を超えた、地方にとって国際化が必要な本質的なものがあるのではないか。それが先行研究で指摘されている、村おこしや過疎社会の活性化という意義のある、国際交流である点だとしても、それだけでは国際交流が約40年間続く理由を説明できない。このような考えから、本研究では「カラモジア運動」の中でも、国際協力である「カラモジア交流」ではなく、約40年間続いてきた国際交流である「からいも交流」に着目¹⁴する。

2.5 本研究の構成

本研究の問いは、中央主導で進められた地方の国際化が停滞していく中、小さな規模の地方の団体を中心にした鹿児島県のからいも交流が、なぜ約40年間も活動を続けることができているのか、である。この問いに取り組むにあたり、第1章では地方の国際化という言葉が広がり、国際交流や国際協力が行われてきたことや、のちにそれ

¹³ 「カラモジア破たん、理事会“暴走”止められず、求められる監視強化」、『南日本新聞社』、2002年2月22日、朝刊。

¹⁴ からいも交流のように、地方の国際化が叫ばれた80年代から現在まで活動を続けている、地方の団体は、先行研究では、他に2つ述べられていた（榎田ら2004）。栃木県宇都宮市が拠点の「いっくら国際交流会」と、佐賀県佐賀市が拠点の、「佐賀・地球市民の会」である（ibid.）。2つの団体はいずれも県庁所在地にある。財政力から考えれば、からいも交流の舞台となった大隅地方の方が弱く、中央の政策の影響を受けやすいと考えた。

（いっくら国際文化交流会．“いっくら国際文化交流会”．いっくら国際文化交流会．

<http://tia21.or.jp/dantai/dantai/017.html>

閲覧日：2020年9月14日：

認定NPO法人佐賀・地球市民の会．“地球市民の会について”．認定NPO法人佐賀・地球市民の会．<http://terrapeople.or.jp/main/7.html>

閲覧日：2020年9月14日）。

らの活動は停滞しつつあることを述べた。そのことを踏まえ、本研究の問いを述べた。第2章では国際交流・国際協力活動に関する先行研究をレビューし、からいも交流・カラモジア交流の概要を述べ、その上でからいも交流を研究対象とした理由を述べた。第3章では、資料分析と、これまで長年からいも交流にかかわって来た人物、からいも交流の発案者である加藤憲一氏の証言、そしてからいも交流をきっかけに、地域で新たな国際交流を30年以上続けてきた人物の証言によって、現在まで約40年続いてきたからいも交流の変遷を追う。第4章では、結論と考察を述べる。

2.6 調査の手順

からいも交流の現在までの活動を追うために、資料分析とインタビュー調査を行った。使用した資料は第1に、からいも交流の拠点であった、南方圏交流センターの刊行するパンフレットである。しかし、筆者が手に入れることのできた、団体が発行した資料は、1981年から1989年までのものに限られた。NPO法人からいも交流のホームページには、2020年までの活動について記してある資料や財務諸表は掲載されていない。からいも交流については1980年代に複数の文献や論文があるものの、2006年の「財団法人カラモジア」解散後、からいも交流について詳細に書いている文献も、筆者が調べた限りほとんど見当たらない。そこで第2に、鹿児島県唯一の地元紙である、南日本新聞社の記事¹⁵を使用した。他の一次資料が入手できない中、活動の流れを一貫して追うことが可能なのは新聞記事であり、地方紙面が限られる全国紙や西日本新聞のようなブロック紙ではなく、日常的なイベントや話題も頻繁に取り上げる地元紙ならば、比較的継続的に活動を追えると考えたからである。

新聞記事の場合、外部に向けた活動は取材している可能性はあるが、組織内部で起きていたことや、取材対象にならなかった活動などを把握することはできない。従って、それらを補完するためにインタビューを行った。事前に、地元紙の記事を読み込み、からいも交流の歴史をまとめた上でインタビューを行った。

インタビューは3名に行った¹⁶。1人目は、現在のからいも交流事務局長である斉藤武夫氏である。斉藤氏は、からいも交流に第5回(1987年)から参加している。現在のNPO法人からいも交流スタッフの中で、最もからいも交流の歴史を知る人物である¹⁷。斉藤氏はカラモジア交流には携わず、現在までからいも交流にのみ携わってきた。そのため、現在までのからいも交流の歴史について詳細に聞くために、斉藤氏にインタビューを行った。

2人目は、からいも交流の発案者の加藤憲一氏である。斉藤氏は、からいも交流に第5回(1987年)から参加しており、それまでのことはあまり知らないことになる。そこで、からいも交流が始まったころの活動を調査するため、交流活動の発案者である加藤氏に話を聞いた。

¹⁵ 南日本新聞データベースの都合上、手に入れることのできた記事は1995年(平成7年)以降のものに限られた。

¹⁶ 3名とも、録音と研究利用、実名利用の許可を得たうえで行った。

¹⁷ 斉藤氏へのインタビューより。

3人目は、蒲生町国際交流協会会長で、地域おこしグループ「蒲生郷太鼓坊主」¹⁸メンバーでもある、小山田辰夫氏である。小山田氏は、からいも交流に第5回から参加した。蒲生町からいも交流実行委員会メンバーでもあった。加藤氏と斉藤氏はそれぞれインタビューで、からいも交流をきっかけに、地域で新たな国際交流を始めた代表的な活動として蒲生町と韓国の伝統音楽団体との30年以上続く交流を挙げている。鹿児島県国際交流課長としてからいも交流に携わった菅井憲郎も、自身の著書の中で、からいも交流をきっかけとした新たな国際交流として、蒲生郷太鼓坊主と韓国の交流を挙げている（菅井 1989）。小山田氏は現在も蒲生町国際交流協会会長として、韓国との交流において中心的な役割を果たしている。

蒲生町と韓国の間では、蒲生町内の祭りで韓国の伝統芸能音楽団体や芸術高校生が招待されて演奏したり、その演奏の後に韓国人学生を招いた蒲生町でのホームステイが行われたり、蒲生町の学生が韓国でホームステイとして受け入れてもらったりと、互いの間で様々な活動が行われている。この、からいも交流をきっかけとした長年続く国際交流の背景には、からいも交流の影響があると考えられる。かつてからいも交流を経験し、それをきっかけに自らが中心になって新たな国際交流を続けてきた小山田氏の語りから、からいも交流が地域に与えた影響をひもとくことが、からいも交流が約40年続いてきた理由の分析につながると考え、インタビューを行った¹⁹。以下の表1は、インタビューした3人の情報をまとめたものである。

¹⁸ 太鼓の演奏を通じて地域おこしをしようとするグループ。蒲生町町制50周年で発足した、「蒲生青年大楠太鼓」が前身。活動年表は巻末資料にある。

¹⁹ 小山田氏へのインタビューは、オンライン会議システム「Zoom」を使って行った。

表1 インタビュー対象者一覧

名前	インタビューを行った日付	インタビューを行った場所	からいも交流・カラモジア交流で活動した期間	役職
斉藤武夫氏	2019年11月1日	鹿児島県霧島市福山町、からいも交流事務局	からいも交流を第5回(1987年)から現在まで	NPO 法人からいも交流、事務局長
加藤憲一氏	2019年11月3日	鹿児島県肝属郡内之浦町加藤氏宅	1982年から2002年まで	からいも交流発案者。現在は活動に関わっていない。
小山田辰夫氏	2020年7月11日	オンライン会議システム Zoom	からいも交流第5回(1987年)に参加	蒲生町からいも交流実行委員会メンバー ²⁰ 。蒲生町国際交流協会会長。蒲生郷太鼓坊主メンバー

出典) インタビューより筆者作成

次章では、資料分析とインタビューから、からいも交流の約40年間をひもとく。

²⁰ 蒲生町からいも交流実行委員会は後に、蒲生町のプロジェクトである、「ふれあう旅・韓国実行委員会」に変わった。

3. 調査結果：からいも交流の活動の歴史

本研究の、「中央主導で進められた地方の国際化が停滞していく中、小さな規模の地方の団体を中心にした鹿児島からのいも交流が、なぜ約 40 年間も活動を続けることができるのか」という問いに答えるために、筆者は 2 つの分析の枠組みを設定した。第 1 に、先行研究で指摘されている地方の国際交流・国際協力活動の難しさを乗り越えられているのかどうか、という点である。第 2 に、先行研究の指摘を乗り越えた以外に別の理由があるのか、という点である。この 2 つの枠組みをもとに、からいも交流の歴史をひもといていく。

3.1 大隅半島から始まった国際交流

本節では、からいも交流は具体的にどのようなきっかけから始まったのかを、インタビューやからいも交流に関する資料をもとに記す。からいも交流の発案者である加藤氏は、高校時代、米国派遣プログラムでアメリカに 40 日間滞在し、それがきっかけとなり高校卒業後はアメリカ留学をし、さらに台湾留学もした（加藤 2001a）。その後のシルクロードの旅、特にバーミヤンでの経験が、加藤氏が「交流」の可能性を見出すことにつながった²¹。加藤氏はバーミヤンでの経験を以下のように語っている。

「そこはかつて仏教文化の絢爛たる都だったわけだ。そのバーミヤンを訪れてね、仏教の伝播が始まったんだと。そこでね、文明的にはどういう意味があるのかちゅうとね、仏像とかのね、形をもってきたのはギリシャだよ。つまり、文明というのは交流していくんだよな。交わっていくんだよな。交わって流れていくんだよ。【中略】結果的には破壊と創造のなかで人々が交流しながら街を作り、文化を作るっていうね」

海外で様々な経験をしたのち、加藤氏は帰国後東京の国際交流団体などで日米貿易摩擦問題などに取り組んでいた（原 2010）。加藤氏が故郷の鹿児島県肝属郡内之浦町に帰省すると、人口がどんどん減り、コミュニティが消えていく故郷の姿を目の当たりにした。すると、この地域は世界との交流を通して、活力や文化を取り戻すべきだと考えるようになった（加藤 2001a）。このように、加藤氏が海外での経験から学んだ「交流」を、廃れていく自らの故郷の活性化のために、実行に移そうと始めたのが、からいも交流であった。

加藤氏と鹿屋市に拠点を置く 5 人の青年企業家の協力のもと、ホームステイの学生を受け入れる家庭を集めた（加藤 2001a）。そして第 1 回からいも交流は 1982 年に鹿児島県の大隅半島の、鹿屋市、串良町、内之浦町の 3 地区から始まった（原 2010）。次節では、からいも交流が始まってからの活動の変化、具体的にはどのように活動が鹿児島県内各地に広がっていったのかについて述べる。

3.2 活動の広がり

からいも交流の活動は、徐々に県内各地に広がっていった²²。先行研究では、国際交流・国際協力活動に参加する人々は、一部の限られた住民であることが多く、参加

²¹ 加藤氏へのインタビューより。

²² 斉藤氏へのインタビューより。

する住民が固定化してしまうことが多いと指摘されている（毛受ら 2003）。からいも交流に参加する住民が固定化された場合、その活動も県内各地にあまり広がらないことが考えられる。こうした先行研究の指摘があるにもかかわらず、なぜからいも交流は県内各地に広がったのだろうか。まず、からいも交流に関する新聞記事やパンフレットから筆者がまとめた、からいも交流の広がりを表す図を以下に示す。

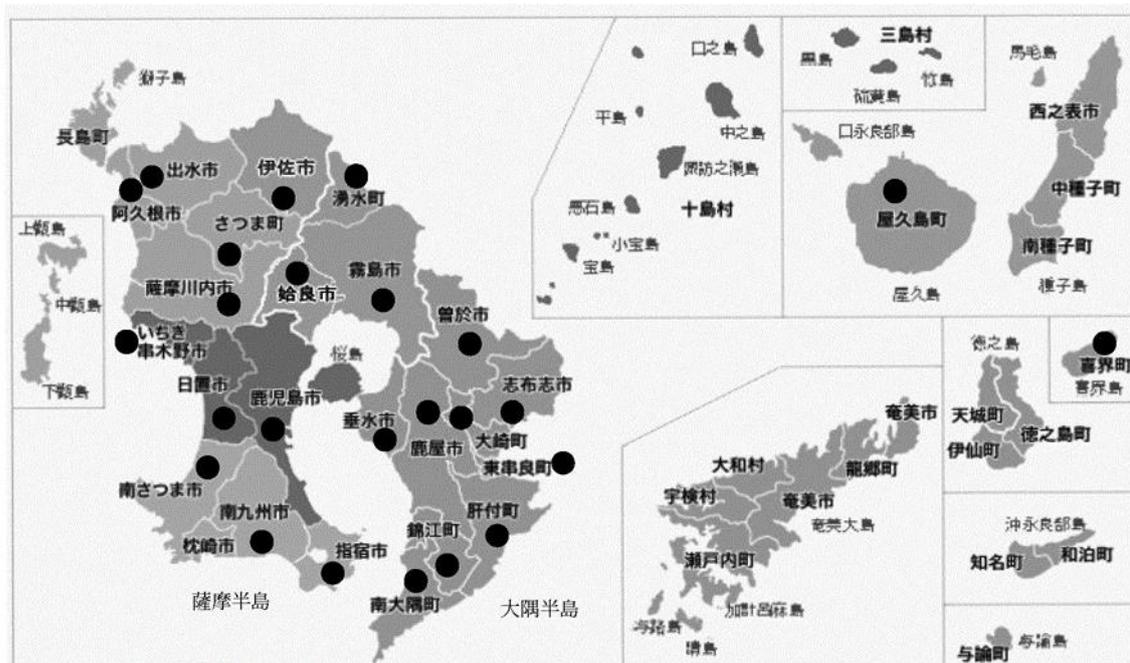


図2 鹿児島県内のからいも交流開催場所²³

出典) 鹿児島県 HP²⁴・南日本新聞記事・南方圏交流センター（1983-1989）より筆者作成

図2から、からいも交流は、県内の多くの場所で開催されてきたことがわかる。本節では、このからいも交流の県内各地へ広がり背景には何があるのかを、インタビューや南方圏交流センターの刊行するパンフレット、新聞記事をもとに示す。

からいも交流が始まった当時は、鹿児島県内で村おこしが盛んであった²⁵。国際交流とは別の方法で村おこしを行っていた小山田氏は、自身がからいも交流に興味を持

²³ 鹿児島県の市町村合併が終わった、2010年3月23日以降の地図。筆者はからいも交流のこれまでの開催場所を地図上にプロットした。ここでいう「開催場所」とは、からいも交流実行委員会が作られた場所や、ホームステイを受け入れた家庭のある市町村を指す。これに加え、宮崎県の一部の市町村でもかつて交流が行われた。

²⁴ 鹿児島県. “県内市町村”. 鹿児島県
<http://www.pref.kagoshima.jp/aa02/link/shichoson.html>

閲覧日：2020年9月20日。

²⁵ 斉藤氏へのインタビューより。

ったきっかけについて、以下のように語っている。

「からいも交流期間中というのは、2週間の間に、各実行委員会のある町に、留学生がみんな集まって、『からいも祭り』²⁶を毎年行うんですね。そこで色々な国の人たちの出し物をやったりするイベントをやるんですね。からいも交流期間中は、で、そういうイベントに、蒲生からは太鼓坊主が演奏をしにいくわけですね。で、国際色豊かなところで演奏しながら、太鼓坊主メンバーも、そうした国際交流の場での演奏にすごい興味を持つようになっていくわけですね」

鹿児島県内で村おこしが盛んであった時代に、ホームステイ受け入れ家庭と参加者の間だけで行われる交流だけではなく、村おこしをしている、様々な地域の団体が参加できる、「からいも祭り」というイベントがあった。そこで国際交流に興味をもった村おこし団体のメンバーが、からいも交流に参加することも考えられる。

からいも交流が広がる背景には、他の理由も考えられる。それは、からいも交流自体の特徴である。からいも交流に参加する留学生は、受け入れ家族に限らず、結婚式や地域の祭り、運動会などにも参加しなければならない（菅井 1989）。具体的には、「お客様ではなく家族の一員として手伝いをする『家庭交流』や家族や地域住民の仕事の手伝いをする『労働交流』に加え、参加者のホームステイ地域にある小・中・高校のどれかに行き学生と交流する『学校交流』、地域の行事に参加する『地域交流』といった交流内容」（NPO 法人からいも交流 2020）がある。つまり、最終日に行われるイベントである「からいも祭り」だけが住民の参加者を増やす直接のきっかけではなく、交流自体が地域ぐるみで行われることで、からいも交流に興味を持つ人が増え、それが活動の広がりにつながる事が考えられる。

図2やインタビューから、からいも交流は県内の多くの地域とつながってきたことがわかった。先行研究では能力不足や情報不足、資金難などの問題点が述べられていた（榎田ら 2004；有田ら 2006）。それらは、「組織としての発展」を目標とした時の問題となったかもしれないが、からいも交流はその目標とは別に「他の地域とのつながり」という横のつながりを作り、地域ぐるみの交流を目指したことが理由で、先行研究で指摘された点は問題にならなかったと考えられる。

次節では、からいも交流をきっかけに始まった国際協力である「カラモジア交流」が始まってからのからいも交流から、カラモジア交流が頓挫した時のからいも交流の状況（1985年から2002年まで）、そして現在までの活動について述べる。

3.3 生き抜いてきたからいも交流

²⁶ からいも交流最終日に行われ、参加した留学生や受け入れ家庭だけでなく、地域住民によるパフォーマンスなどもあり、様々な人、団体が参加する。（小山田氏へのインタビューより）

3.3.1 地に足のついた国際交流

第3章第2節では、からいも交流が県内各地にどのように広がっていったのかについて述べた。本項では、からいも交流をきっかけに1985年から始まった、国際協力であるカラモジア交流が始まった後のからいも交流について述べる。

カラモジア交流が始まると、加藤氏はからいも交流の現場に携わらなくなった²⁷。カラモジア交流が行われている間も、からいも交流は続いてきた²⁸。斉藤氏は、カラモジア交流が始まってからのからいも交流の状況について以下のように語っている。

「からいも交流は、からいも交流の後援会が活動資金という形でもって、あと学生の参加費用、それだけしかなかったですね。NGOの活動²⁹に比べたら全然安かったですよ」

1985年にカラモジア交流が始まった後、カラモジア交流はますます発展していった。1988年にカラモジア大学³⁰が設立されたり、1994年に鹿屋市にアジア・太平洋研修村「カラモジア郷」³¹がオープンしたり、1998年にはミャンマーで貧困・麻薬を撲滅させるためのプロジェクトを開始したりと、カラモジア交流は発展していた。このような、カラモジア交流における様々な変化がある一方で、学生からの参加費用と後援会の活動資金によって、からいも交流は支えられてきていた。1985年には、「コグマ交流」³²が始まった。1988年のパンフレットには「参加留学生21か国147名、受け入れ地区4市25町と、ともに過去最高」（南方圏交流センター1988）とある。1989年には、「からいも交流は、それまで、官僚や経済人など特定の階層の人達はその担い手として考えられていた国際交流を、庶民レベルまで引き下げた（上げた？）成功例として国内外からの高い評価を集めてきた。母ちゃんの力無しには考えられない」（南方圏交流センター1989）として、「母ちゃんたちの国際交流」と題してパンフレットを作っている。からいも交流は鹿児島県の農村の自然や社会条件を生かした内容となっており、普段着で参加することを重視している（渡辺1994）。つまり、発案者である加藤氏がからいも交流を離れ、カラモジア交流が発展していったのちも、交流をするにあたり費用が比較的かからないことや、地域に根差した活動を行ってきたことが理由で、からいも交流の活動が続いてきたと考えられる。

からいも交流は1982年から現在まで続いてきた一方で、2002年には国際協力を行ってい

²⁷ 加藤氏、斉藤氏へのインタビューより。

²⁸ 加藤氏、斉藤氏へのインタビューより。

²⁹ 「財団法人カラモジア」によるカラモジア交流のこと。

³⁰ カラモジア大学は、地域全体をキャンパスとし、アジアとの農村交流を通じて相互の人づくりをめざす農民ネットワーク型学舎である（加藤2001b）。アジアの農村リーダーを1年間研修生として受け入れ、開発途上国の地域づくりの貢献を目的として作られた（*ibid.*）。

³¹ アジア・太平洋研修村カラモジア郷は、アジア・太平洋地域の人材育成を目的に作られた（加藤2001b）。現在はアジア・太平洋農村研修センターとして残っている（*ibid.*）。

³² コグマ交流は、夏に行われる日韓交流のことで、朝鮮語でサツマイモのことをコグマと呼ぶことから名付けられた（加藤2001a）。韓国に住む日本語を学ぶ韓国人の大学生が、鹿児島県でホームステイをする（*ibid.*）。

た「財団法人カラモジア」の基本財産取り崩しが発覚し、カラモジア交流は頓挫した。次項では、カラモジア交流が頓挫した時の、からいも交流の状況について述べる。

3.3.2 交流存続を望む声

2002年に、国際協力を担当していた「財団法人カラモジア」は団体の基本財産取り崩しを発表した³³。2006年8月には、基本財産復元を断念し、財団法人カラモジアは解散した。同年10月にはNPO法人「からいも交流」が認証された³⁴。からいも交流の発案者である加藤氏も、「1985年にカラモジア交流を始めた際にからいも交流は他のスタッフに任じた」³⁵と話しており、からいも交流には携わらなかった。2002年以降、活動はからいも交流だけになった。

基本財産取り崩しが発覚した頃は、カラモジア交流に限らず、からいも交流の存続も危ぶまれていた際に、交流継続を求めるの声が住民たちから挙がった事が南日本新聞社の記事からわかった。例えば、「農業を通じたカラモジアの活動は、過疎にあえぐ農村地帯に自信と活力を与えた。その理念を否定するものはいないだろうし、国際交流に携わった住民の多くが国際交流を望んでいる」³⁶といった声があった。さらに、「財団を体質改善したうえで、活動を継続できないか。でなければ過疎の村は一層寂しくなる」³⁷という意見もあった。

2002年に国際協力活動が頓挫したものの、同年3月にはからいも交流は行われた。この時のからいも交流に関する南日本新聞社の記事では、「大勢のボランティアが来たり、様々な人から励ましのメールが届いたりして『事件をきっかけにしてこれまでの活動が実を結んでいることを逆に実感した』と明るい表情」³⁸と書かれていた。2006年にNPO法人「からいも交流」が認証された際には、「財団法人カラモジアが解散を選択し、交流事業だけをNPOに引き継ぐことになった。からいも交流活動の担い手の畜産農家からは交流の存続に安堵した。カラモジアを支援してきた鹿屋市の市長も『今後は地域に根差した事業をしてくれるようお願いしたい』と要望した」³⁹という記事があった。国際交流・国際協力活動を続けるにあたり、参加する人々は、「地域に根差した活動」という点を重視し、その点でからいも交流が評価されてきたことが考えられる。

³³ 「カラモジア破たん、理事会“暴走”止められず、求められる監視強化」、『南日本新聞社』、2002年2月22日、朝刊。

³⁴ 2001年に各地のからいも交流実行委員会が集まり「からいも交流連絡協議会」ができた。この任意団体が、後にNPO法人「からいも交流」として認証された。(斉藤氏へのインタビューより)

³⁵ 加藤氏へのインタビューより。

³⁶ 「[解説]カラモジア破綻=求められる監視強化」、『南日本新聞社』、2002年2月22日、朝刊。

³⁷ 「[南風録]からいも交流継続を」、『南日本新聞社』、2002年2月23日、朝刊。

³⁸ 「[記者の目]あのみなごしに答えたい」、『南日本新聞社』、2002年3月16日、朝刊。

³⁹ 「財団法人カラモジア、交流事業をNPO『からいも交流』に草の根交流残り安堵」、『南日本新聞社』、2006年8月8日、朝刊。

3.3.3 過去の参加者とのつながりと新たな活動

2006年にNPO法人として認証され、今でもからいも交流は続いている。南日本新聞社の記事からは、かつてのからいも交流に参加した留学生のつながりがあつたり、時代の変化がありながらも、新たな活動が生まれたりしてきたことがわかった。

例えば、27年前に参加した留学生がホームステイ受け入れ先である家庭を訪問し、からいも交流関係者の11家族との間で夕食会が開かれたり⁴⁰、韓国の仁川広域市役所職員にからいも交流参加者がいた縁から、かつてホームステイを受け入れた人物の所属する村おこし団体との交流⁴¹も行われたりしている。

これまでのからいも交流の経験から生まれた事例は他にもある。アジアからの技能実習生や国際交流委員と、地域住民が交流する祭りがあつた⁴²。それは、からいも交流日置市実行委員会や実習生受入企業、飲食店などが運営委員会を組織して企画された。2018年12月末時点での鹿児島県内の在留外国人数の増加率は、前年比15.9%と、全国で最も高く、その背景には、技能実習生の増加がある⁴³。このように、外国人留学生をかつて受け入れた時のノウハウから、増加する技能実習生に対しても地域で受け入れ交流するイベントが生まれている。

現在のNPO法人「からいも交流」事務局である斉藤氏は、福島県出身であり、故郷とのつながりを活かして東日本大震災時には、福島県の子どもたちを鹿児島県でのホームステイに招待した⁴⁴。斉藤氏はその時のことについて、以下のように語った。

「からいも交流のホームステイというノウハウが活きましたよね。あの時、福島県の子どもたちは放射能の関係で、外で遊ぶこともできなかつた。夏休みになつても外で遊べないということがありました。だったら鹿児島に呼んで2週間のホームステイをさせて元気に外で遊ばせようということをしました」

これらの事例やインタビューから、現在でも地域全体で国際交流を行うノウハウが受け継がれており、「ホームステイ」という経験を、国際交流以外の活動に活かす柔軟さがあることがわかる。次節ではどのようなことが要因で、地域全体で行う交流が続いているのかということについて、資料分析とインタビューから述べる。

3.4 人々を巻き込む、「原点」

からいも交流の経験から、蒲生町で韓国との交流を30年以上続けている小山田氏は、からいも交流からの学びとして、「自分たちが持っているもの」といった、足元

⁴⁰ 「27年ぶり、志布志市に“里帰り” / からいも交流参加のインド出身男性 = 受け入れ家族と再開」、『南日本新聞社』、2014年8月22日、朝刊。

⁴¹ 「韓国から派遣の市職員と交流会/熱闘会議など = 鹿児島市」、『南日本新聞社』、2007年10月10日、朝刊。

⁴² 「在住外国人と盆踊りで交流/日置市」、『南日本新聞社』、2019年7月20日、朝刊。

⁴³ 「開国新時代かごしま 在留外国人、鹿児島県の増加率は全国最高/昨年末15.9%、技能実習が要因」、『南日本新聞社』、2019年10月5日、朝刊。

⁴⁴ 斉藤氏へのインタビューより。

にある「原点」で交流しようとすることを挙げた⁴⁵。蒲生町の「蒲生郷太鼓坊主」と韓国の芸術団体との間では、お互いに共通の「楽器や太鼓」を使って、蒲生町の祭りで演奏している。からいも交流参加学生の募集要項には、「お客様ではなく、受け入れ家族の一員として」や「家族の一員として、積極的に家事などのお手伝いをしましょう」といったメッセージがある（NPO 法人からいも交流 2020）。斉藤氏はこのメッセージについて以下のように語った。

「まあ、自分たちはとにかく飾らないっていうのが原点だと思ってます。このプログラムにも書いてますけど、観光ではありませんって書いてるでしょ。学生にもオリエンテーションでいうんですけど、お客さんとしてきてるわけではないと言いますね。受け入れ家庭にもそういう風に伝えてあります。自分の子どもが帰ってきたというような風に接してくださいと書いてます。ですから家族が1人増えたという考えですね。料理もそんなたいそうに多く作るわけでもなく。1週間2週間お客さんとして扱うと息切れしますから。そういう風には接しないでくださいと伝えてますね。学生も受け入れ家庭も力を抜いて入らないと、2週間ごちなくなりますもんね」

両者の語りや資料から、ありのままの姿で、自分たちが持っているものを使って交流しようとする姿勢があり、農業や音楽などその地域に根差したものを活用してきたからこそ、多くの人を巻き込めたことが考えられる。図2からわかるように、からいも交流は多くの地域とのつながりがあった。これらのことが理由で、国際交流に参加する住民が固定化せずに、からいも交流の活動が広がったと考えられる。

⁴⁵ 小山田氏へのインタビューより。

4. 結論と考察：国際交流が長年続く理由

4.1 結論

本研究の問いは「中央主導で進められた地方の国際化が停滞していく中、小さな規模の地方の団体を中心にした鹿児島のからいも交流が、なぜ約40年間も活動を続けることができているのか」であった。この問いに答えるために、筆者は2つの分析の枠組みを設定した。第2に、先行研究で指摘されている地方の国際交流・国際協力活動の難しさを乗り越えられているのかどうか、という点であった。第2に、先行研究の指摘を乗り越えた以外に別の理由があるのか、という点であった。

地方の国際化が叫ばれ始めた1980年代から約40年国際交流が続いてきたからいも交流を事例に、からいも交流に関連する資料分析と、からいも交流の発案者、からいも交流を続けてきたスタッフ、からいも交流の経験から新たな国際交流を30年以上続けてきた人物へのインタビュー調査を行い、以下3点の結論を導いた。

第1に、横のつながりを作り、その地域に根差したものを活用した地域ぐるみで行われる交流であることから、多くの人々を活動に巻き込めたことで、交流に参加する者の固定化があまり見られなかったことが考えられる。国際交流・国際協力活動に参加する人々は、一部の限られた住民であることが多く、参加する住民が固定化してしまうことが多い(毛受ら 2003)。しかし、図2から、からいも交流が鹿児島県内各地に広がったことがわかった。その背景には、「からいも祭り」というイベントが、ホームステイの受け入れ先の家庭と留学生だけではなく、村おこしを行っているグループも参加できるものであり、そこが多くの人々が国際交流に接点を持つ機会となっていたことがあった。からいも交流では、留学生と地域の様々な人が繋がりを持つ。ここでは農業や音楽等その地域に根差した交流ができたことで、地域の性格を保ちながら交流が続いてきたと考えられる。

第2に、長年携わっている人、様々な年齢層、経験層が異なる人たちが、積み重なっていくことによって、誰かが抜けても補い合えるような体制ができていることが考えられる。国際交流・国際協力活動の担い手の世代交代が進まない結果、担い手が高齢化したり、組織の弱体化が起こったりするという指摘がある(毛受ら 2003)。からいも交流の発案者である加藤氏がその活動に携わらなくとも、第5回から参加している斉藤氏が、事務局長として活動を続けている。同時期にからいも交流に参加した小山田氏も、韓国との新たな交流を約30年間続けてきた。新聞記事からは、技能実習生との地域での交流や福島県の子どもたちをホームステイに招待するなど、これまでの経験をもとにした新たな活動が見られた。これらのように、からいも交流が各地に広がったことで、87年から参加している人がいまでもからいも交流を続けている一方、各地では新しい人たちがその発想の担い手になっている。

第3に、先行研究の指摘を乗り越えた以外にからいも交流が続いてきた理由として、地域の人々の声があった。からいも交流の歴史をひもとく中でカラモジア交流が頓挫し、からいも交流の活動も危ぶまれた際に、その継続を求める声があがったことがわかった。その背景には、これまで他の地域の人と一緒に留學生との交流を深めてきた部分や、1つの地域の中でも様々な人が地域に根差した国際交流に関わって

きたことがあると考えられる。ここに、中央からの地方交付税交付金などの、中央政府からのインセンティブがなくても、自分たちで資金を調達してでも活動をやる意義があると考えられる。

4.2 考察

本研究では、地方の国際化が叫ばれた 1980 年代から現在まで続いてきたからいも交流が、現在まで約 40 年間続く理由を明らかにした。それでは、「地方の国際化」とは具体的に何を意味するのだろうか。

先行研究から、地方の国際化政策自体は、地方にとって始めは社会の流れに沿って「受け身」で始まったことが考えられる。しかし、それを取り入れ、自分たちの地域に根差して発展させ、活動を続けようとする住民たちの積極的な取り組みが、からいも交流に見られた。そういった点では、「地方の国際化」は、「地域にこれまであまり無かった『国際』の要素を取り入れた住民による、地域に根差した積極的な行動のきっかけ」であることが考えられる。

4.3 本研究の限界と意義

本研究では、からいも交流の影響から、新たな国際交流を始めた国際交流の事例として、蒲生町と韓国との交流を取り上げた。からいも交流をきっかけとした、鹿児島県内の国際交流は他にもある。片野田 (2015) は、その一つとして、日置市とマレーシアのspanジャヤ市の友好都市締結を取り上げている。南日本新聞社の記事でも、新たに始まった村おこしを目的とした活動の中で、過去のからいも交流の経験について言及しているものが時折見られる。

これらのように、からいも交流が鹿児島県内に広がったことで新たな活動が生まれたり、その経験がいかされたりしていることを表す事例が他にもある。従って、本研究ではからいも交流が約 40 年続いた理由を明らかにするために、からいも交流を経験した全ての地域の現在までの活動やその変化を、網羅しているわけではない。からいも交流が地域に与えた影響をひもとき、そこからからいも交流が続く理由をさらに考えるために、今後も様々な事例を扱った研究が必要だと考えられる。しかし、からいも交流の現在までの歴史を追い、国際交流が続く理由となった、からいも交流自体の特徴を明らかにした点に、本研究の意義がある。

参考文献

<書籍・文献>

- 有田典代編著、毛受敏浩、榎田勝利、有田典代監修、有田典代編（2006）『国際交流・協力活動入門講座Ⅲ—国際交流・国際協力の実践者たち—』明石書店。
- 榎田勝利編著、毛受敏浩、榎田勝利、有田典代監修（2004）『国際交流・協力活動入門講座Ⅱ—国際交流の組織運営とネットワーク—』明石書店。
- 恩田守雄（2010）『グローバル時代の地域づくり』学文社。
- 片野田優子（2015）『戦後日本の国際交流と地域社会：鹿児島県内自治体の地域間交流の事例を中心として』鹿児島大学リポジトリ。
- 加藤憲一（2001a）『辺境からの挑戦—カラモジア運動の20年（上）—』毎日新聞社。
- 加藤憲一（2001b）『辺境からの挑戦—カラモジア運動の20年（下）—』毎日新聞社。
- 国際交流基金（2001）「日本の国際交流活動団体の現状」国際交流基金。
<https://www.jpf.go.jp/j/about/survey/katsudo/pdf/2000.pdf>
（閲覧日：2020年7月23日）。
- 国際交流基金（2006）「国際交流活動団体に関する調査」国際交流基金。
<https://www.jpf.go.jp/j/about/survey/katsudo/pdf/2005.pdf>
（閲覧日：2020年7月23日）。
- 佐藤寛監修（2017）『国際協力用語集——第3版』国際開発ジャーナル社。
- 佐藤智子（2011）『自治体の姉妹都市交流』明石書店。
- 菅井憲郎（1989）『ムラからの国際交流』学陽書房。
- 永井浩（1989）『地方の国際化—新しいアジアとの出会い—』新泉社。
- 原学（2010）「国際貢献で村おこし」『国際政治再考に向けて』神奈川大学国際経営研究所、31-39頁。
- 村瀬章（1984）『からいも交流—鹿児島の地球人たち—』はる書房。
- 毛受敏浩編著、毛受敏浩、榎田勝利、有田典代監修（2003）『国際交流・協力活動入門講座Ⅰ—草の根の国際交流と国際協力—』明石書店。
- 山下永子（2008）『地方の国際政策—連携・ネットワーク戦略の展開—』成文堂。
- 渡辺牧（1994）「草の根の国際交流から住民参加型の国際協力へ—南九州のカラモジア運動の事例研究—」『国際開発研究』第3巻、123-129頁。

<からいも交流に関する1次資料>

- 南方圏交流センター（1983）『グラフからいも交流83年春—わたしたちの町や村から、手づくりの国際友情を—』。
- 南方圏交流センター（1984）『グラフからいも交流84—よみがえれふるさと、国際友情の中で—』。
- 南方圏交流センター（1985）『グラフからいも交流85—ひん飲め異文化、ひっ翔べ若者—』。
- 南方圏交流センター（1986）『グラフからいも交流86—特集カライモ海をわたる—』。

南方圏交流センター（1988）『グラフからいも交流 88—コグマ・ロードは広がる—』。
南方圏交流センター（1989）『グラフからいも交流 89—母ちゃん達の国際交流—』。
NPO 法人からいも交流（2020）「第 39 回からいも交流・春 ホームステイ参加学生募集要項」NPO 法人からいも交流。

<https://www.eng.tohoku.ac.jp/media/files/pdf/insc/event/ev191105.pdf>

（閲覧日：2020 年 8 月 1 日）。

<新聞>

南日本新聞社 「カラモジア破たん、理事会“暴走”止められず、求められる監視強化」2002 年 2 月 22 日、朝刊。

南日本新聞社 「[解説] カラモジア破綻＝求められる監視強化」2002 年 2 月 22 日、朝刊。

南日本新聞社 「[南風録] からいも交流継続を」2002 年 2 月 23 日、朝刊。

南日本新聞社 「[記者の目] あのまなざしに答えたい」2002 年 3 月 16 日、朝刊。

南日本新聞社 「財団法人カラモジア、交流事業を NPO『からいも交流』に草の根交流残り安堵」2006 年 8 月 8 日、朝刊。

南日本新聞社 「韓国から派遣の市職員と交流会/熱闘会議など＝鹿児島市」2007 年 10 月 10 日、朝刊。

南日本新聞社 「27 年ぶり、志布志市に“里帰り”/からいも交流参加のインド出身男性＝受け入れ家族と再開」2014 年 8 月 22 日、朝刊。

南日本新聞社 「在住外国人と盆踊りで交流/日置市」2019 年 7 月 20 日、朝刊。

南日本新聞社 「開国新時代かごしま 在留外国人、鹿児島県の増加率は全国最高/昨年末 15.9%、技能実習が要因」2019 年 10 月 5 日、朝刊。

巻末資料

カラモジア運動年表

1981	鹿屋市に南方圏交流センター設立
1982	第1回「からいも交流・春」始まる（鹿屋市、内之浦町、串良町の1市2町）
1985	カラモジア交流始まる
1985	コグマ交流始まる
1987	財団法人からいも交流財団 ⁴⁶ 設立。第1回「からいも交流・夏」始まる
1988	カラモジア大学設立
1994	鹿屋市にアジア・太平洋研修村「カラモジア郷」オープン
1998	「財団法人カラモジア」に名称変更し、海外の地域開発プロジェクトへ活動を広げる。ミャンマーで貧困・麻薬を撲滅させるためのプロジェクトを開始
2001年	からいも交流実行委員会が集まり、任意団体である「からいも交流連絡協議会」ができる
2002	2月 基本財産取り崩し発覚 加藤憲一氏ら辞任 6月 基本財産 5000 万の復元計画を鹿児島県に提出 鹿屋市で「新生カラモジア大会」
2003	2月 佐賀県のNPO法人「地球市民の会」へミャンマー事業引継ぎ発表
2006	8月 NGO「財団法人カラモジア」の解散決定（基本財産復元断念） 10月 NPO法人「からいも交流」認証。財団法人カラモジアの残余財産全額引継ぎ
2019	3月 第38回からいも交流・春、開催 7月 第32回からいも交流・夏、開催
2020	現在まで、からいも交流を1年に春・夏の2回行っている 3月 第39回 からいも交流・春、新型コロナウイルスの影響で中止

出典) 南日本新聞社記事・インタビューより筆者作成

⁴⁶ 財団法人からいも交流財団…からいも交流を担当する。

蒲生町と韓国との、国際交流年表

1979	蒲生太鼓坊主の前身、「蒲生青年大楠太鼓」発足
1986	蒲生太鼓坊主結成。からいも交流の実行委員会が発足。コグマ交流がスタート
1987	蒲生太鼓坊主メンバーの小山田辰夫氏がコグマ交流に参加し、韓国の大学生を受け入れ
1988	小山田氏が受け入れた韓国の大学生との縁から、韓国遠征。韓国・ソウルで蒲生郷太鼓坊主、初の演奏
1994	町を挙げた町おこしをと、「日本一大楠どんと秋祭り」開催。韓国から伝統芸能団体招待。韓国の大学生や高校生が蒲生町に民泊。蒲生郷太鼓坊主も演奏
1996	蒲生郷太鼓坊主が、韓国政府の招待を受け、韓国の国立劇場で演奏。日本の音楽団体の演奏が許されたのは、太鼓坊主が初めて。蒲生太鼓坊主結成 10 年
1997	蒲生町の小中高生が夏に韓国でのホームステイをする、「ふれあう旅・韓国」が始まる
2001	蒲生郷太鼓坊主、韓日文化交流会の舞台に立つ
2006	蒲生町と韓国の民間交流、20 年
2007	蒲生町国際交流協会発足
2011	蒲生と韓国の民間交流、25 年
2013	「日本一大楠どんと秋祭り」20 周年
2016	蒲生郷太鼓坊主、結成 30 年

出典) 南日本新聞社記事・インタビューより筆者作成